



TITLE:

## 2.2 実験廃液処理報告(1)京都大学の 有機廃液処理について

AUTHOR(S):

真島, 敏行

---

CITATION:

真島, 敏行. 2.2 実験廃液処理報告(1)京都大学の有機廃液処理について.  
環境保全 2016, 30: 24-25

ISSUE DATE:

2016-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209826>

RIGHT:

## 2.2 (1) 京都大学の有機廃液処理について

京都大学環境科学センター 真島 敏行

平成 26 年度からは全ての有機廃液は外部委託処理となった。

図 1 は、過去 40 年分の年度別有機廃液処理量の棒グラフであるが、平成 26 年度の処理量は 154,975kg となり、前年度より約 4.6%にあたる 6,749kg 増加し、これまでの最高値となった。廃溶媒量は 108,123kg で前年度より 3.6%の 3,738kg 増加し、水溶性希薄廃液は 46,852kg で 6.7%にあたる 3,011kg の増加となった。(過去、廃液の計量として学内処理分は体積(L)であったが、外部処理の計量は重量(kg)表記とする。)

図 2 のように平成 26 年度の処理量の内訳として、吉田地区は 39.0%の 60,517kg であり、桂地区は 39.8%の 61,670kg、宇治地区(農学部を除く)の外部委託処理量は 20.6%の 31,916kg、そしてその他として、犬山地区の

霊長類研究所が 652kg と大津地区の生態学研究センターの 220kg 合わせて 0.6%であった。

平成 26 年度の有機廃液処理量の部局別内訳比率を示したのが図 3 である。工学研究科は前年度に比べ、2,697kg 増加し、全学の 39.8%であった。宇治地区(農学部を除く)は 4,655kg 増加し、全学の 20.6%を占めている。理学研究科は前年度より 1,550kg 増加し 12.1%であり、薬学研究科は前年度より 108kg の減少で全学の 11.9%を占めている。

表 1 は平成 26 年度の部局別処理量を示している。

注:有機廃液の KUCRS への登録について有害廃油(最も多い物質名)と PRTR 物質(該当物質名と重量)の記入については、要注意!

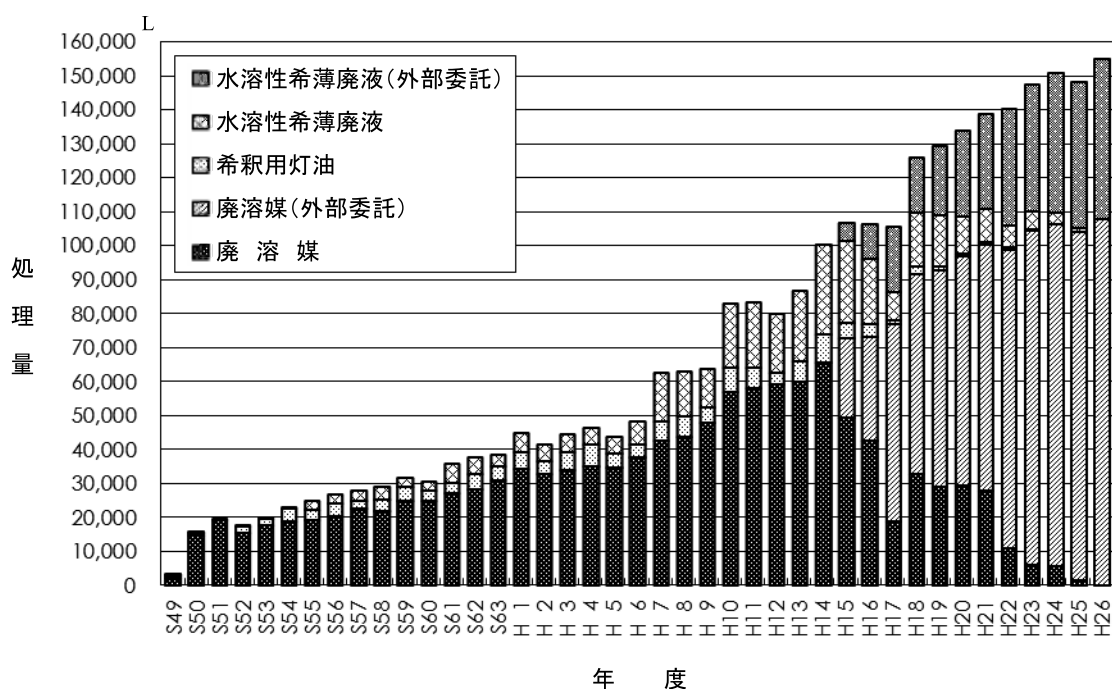


図 1 有機廃液処理量 (年度別)

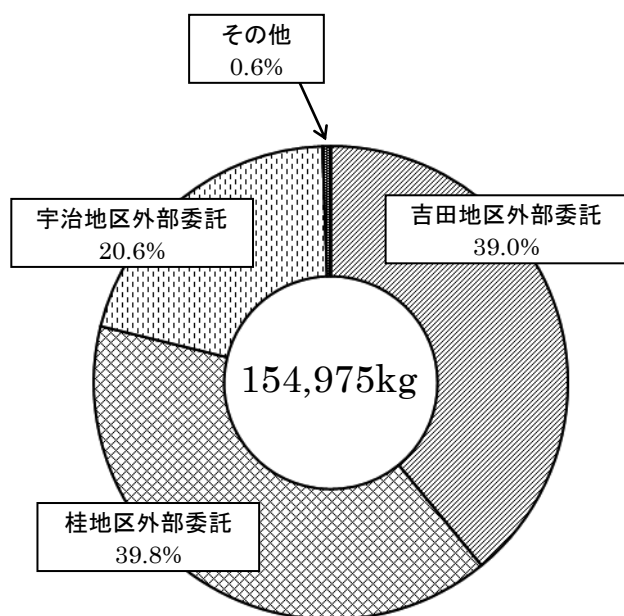


図2 平成26年度有機廃液処理量

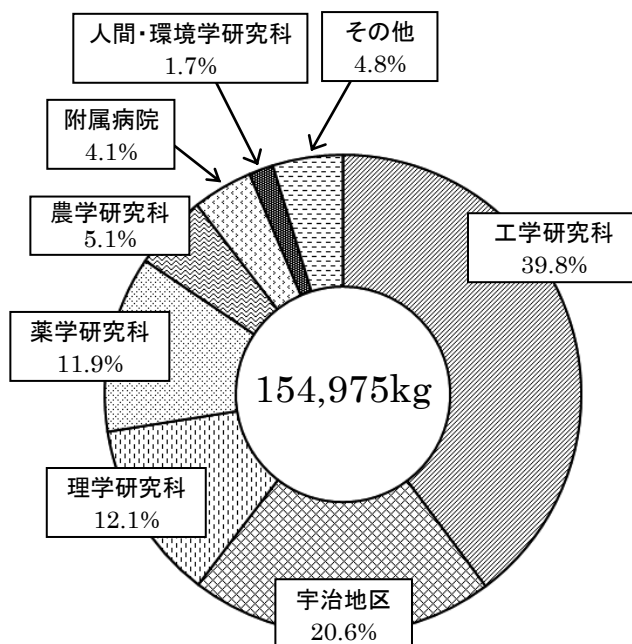


図3 平成26年度部局別有機廃液処理量

表1 平成26年度部局別処理量

部 局 名	廃溶媒 kg	水溶性希薄廃液 kg	地 区 名	計 kg
人間・環境学研究科	1,450	1,110	吉田地区	2,560
理学研究科	14,020	4,760		18,780
生命科学研究科	490	230		720
医学研究科	450	250		700
附 属 病 院	2,060	4,250		6,310
薬学研究科	14,011	4,460		18,471
農学研究科	4,400	2,981		7,381
エネルギー科学研究科	390	190		580
再生医科学研究所	290	250		540
ウイルス研究所	0	320		320
iPS細胞研究所	843	0		843
フィールド科学教育研究センター	33	79		112
学際融合研究推進センター	170	1,710		1,880
環境科学センター	70	80		150
物質－細胞統合システム拠点	850	320		1,170
工学研究科	43,770	17,900	桂 地 区	61,670
宇治地区(NEDO 以外)	24,020	7,270	宇治地区	31,290
NEDO 革新型蓄電池プロジェクト	626	0		626
生態学研究センター	20	200	大津地区	220
霊長類研究所	160	492	犬山地区	652
合 計	108,123	46,852		154,975